

## 若菜・柏木物語論序説

吉 岡 曠

### (一)

源氏物語が桐壺巻から夢浮橋巻まで、一貫した構想に基いて書かれた物語でないことは、今更説明を要しない。又、一帖か一、二帖ずつ次第に書きつがれていった結果、自然と五十四帖の形をなしたと考えるのが当たらないことも、恐らく説明を必要としない。そこで、通説では、これを三部作とする。しかし通説の三部説も、構想的には必ずしも厳密な区分とは云い難い。藤裏葉巻と若菜巻の間、幻巻と匂宮巻の間は、もっと数多く認められるべき構想上の段落の中のただ二つであるに過ぎない。現に第一部は、武田宗俊氏らの成立論によって、光源氏物語である一篇の長編物語と、その中に適宜挿入された、いくつかの短篇物語群に分類された。

従来第一部の物語は、或る程度の独立性を持った小話が互いにゆるく結合って、何となく一篇の物語を形作っているという風に見るより仕方のないものであった。しかし、第一部の中から玉鬘系の十六帖を取り去ってみると、残りの十七帖は、あらかじめかなりの細部までプロットが組み立てられ、一貫して一つの主題を追った、まぎれもない一箇の長編物語であることがはっきりとする。その主題とは何か。簡単に、光源氏の一代記であると云ってお

こう。それでは取り除いた十六帖の方ほどのような性質のものと考えることが出来るか。この系列の物語は、話の内容その他から、空蟬物語、夕顔物語、末摘花物語、玉鬘の物語と呼ばれるべき四つのグループに分けることが出来る。そしてこれらのグループと光源氏物語の小話群とを比較すると、両者が或る本質的な点で、はっきりと異質のものであることに気がつかないわけにはいかない。光源氏物語の、例えば源氏が山寺で若紫を見そめて二条院に迎え取る話、須磨に流される原因となった朧月夜とのいきさつ、須磨行から帰京までの一連の事件等々は、いずれも源氏の一生における一事件という視点から見ると、すなわち物語全体との関連において始めて或る意味を持ってくるので、一代記のわくからははずして、それだけを個別的に取り出しても、それは物語の断片でしかない。美しいタブローではあっても、作者はそこで何事も語ってはいない。それに対して、或る男が普賢ぼさつの乗物のような鼻に失望する話は、それだけで何事かを語っている。つまりこの話は主題を持っている。今或る男と云ったが、この系列の話の主人公は、先にそれぞれの話の仮題として選んだ女性達であり、光源氏は、ここではいわば男性一般という資格で登場する、単なる相手役ではない。従ってこの相手役は必ずしも光源氏であることを必要とせず、これが頭中将であっても、交野の少将であっても、それぞれの物語の本質はたいした影響をこうむらない筈である。要するにこの系列の物語は光源氏のゴシップでもなく、一代記の補足でもないので、本質的には、一代記から独立した四篇の短い物語にはかならない。

源氏物語の第一部が、独立しているような小話群が、何とはなしに集って出来上った物語らしきものである限りは、われわれはこれに手をつける術を知らない。一篇の長編物語と、四つの短い物語とに作者のモチーフの在り所を確かめることによって、はじめて第一部論が可能になる。その意味で、阿部秋生氏から武田氏に

至る成立論の成果が(それをそのまま構想上の単位として受けとることにより)、この物語をはじめ近代批評の対象にすることを可能にしたと云って、恐らく過言ではない筈である。

ところで若菜から幻までの八帖が追加されたことよって、源氏の一代記は誕生からその死まで首尾よく完結することになり、第二部は、普通、源氏の後半生を描いた第一部の続篇と云われている。しかし原源氏物語の、厳密なプロットによって支えられ、比類のない均斉を保っている物語的世界、更に云えば、その均斉そのものが主題であるような一世界を想起する時、この明瞭な輪郭を持った世界の安定を、すなわち原源氏物語のテーマそのものを破壊することなしに、どのような続篇が可能であるか、疑わざるを得ない。事実、玉鬘系の物語が光源氏のゴシツブという体裁を借りた、それぞれ独立の物語であったように、若菜巻からは一代記の続篇という形を借りて、新たなモチーフによる、全く別個の物語が始まるのである。そしてこの第二部も、やはりいくつかの構想上の単位に分解し得る余地を持っていて、右に云ったことを確認するためにも、それから先へ話を進めるためにも、われわれはここでもやはり当面の対象を確定することから始めるのが便利である。

若菜から幻までの八帖は、その筋を追っていくと、朱雀院の女三宮が源氏の六条邸に降嫁し、やがて柏木と密通事件を起して、その結果柏木は死に女三宮は出家するという話と、その柏木の未亡人に、源氏の息子の夕霧が懸想していざこざを起す話と、紫上が死んで、源氏がそれを契機に出家の志をかためるというエピソードの二帖と、三つの部分にかなりはっきりと分けることが出来る。念のためこれを巻名で云うと、若菜上下と柏木巻が第一のグループ、横笛、夕霧巻が第二のグループ、御法、幻巻が第三のグループに属する。この他に、出家後の女三宮と源氏の有様を描いた鈴虫巻があって、これは横笛巻と夕霧巻の間にはさまっている。

右の中、夕霧に関わる話は、第一のグループから派生した挿話的な話で、或る物語の部分と云うよりも、それ自体一つの独立した物語になっていることは容易に見分けがつく。そこで、第一のグループと第三のグループを結ぶ話の糸、つまり六条邸を舞台にした光源氏晩年の物語の中に、夕霧の挿話がはさまっている、というのが恐らく大方の見方であろうし、実際に第二部がわれわれに呈している外貌である。しかしわたしは第一のグループと第三のグループは本来無関係のものではなかったかと考える。つまり若菜巻の筆をとった時、作者が書こうと意図したのは若菜上下と柏木巻の物語であって、その際、横笛・夕霧巻の物語も、エピソードの二帖も、作者の構想の中にはふくまれていなかったのではないかと推定する。そしてその推定の手がかりは、先に触れた鈴虫巻の存在、と云うよりも鈴虫巻がいわゆる「並」の巻の数に入っているという簡単な一事実にほかならない。

第一部の「並」の巻十四帖がすべて玉鬘系に属すること、従って「並」の意義が文字通り後記並置の意ではないかと推定されること、その意味で当然「並」であるべき帯木玉鬘巻が並の巻に入っていない事情などは、風巻氏、武田氏にすぐれた論文があるからここでくり返す必要はあるまい。第二部以降で「並」と註記された三帖についても、紅梅竹河の両巻は、巻序に疑問があったり、偽作の疑いが濃厚だったりして、「並」印の資格十分と一応考えることが出来る。ただこの鈴虫巻だけは、どうしてこれが後記挿入の巻でなければならないのか、いささか理解に苦しむ。ちなみに武田氏は、この巻がその前後の横笛巻とも夕霧巻とも話の筋が遊離していることから、「後記挿入の典型的な巻である」と簡単に云っておられる。しかしそれだけでは「挿入」の徴証としていかにも不十分であるばかりか、なるほど横笛鈴虫夕霧の三帖だけを取り出す時、この巻の存在は確かに話の筋を中断して不自然だが、これを第二部全体の構造の中に置いてみる時、決して遊離した存在とみなすことは出来ない。むしろ第二部が第二

部として一つの全体であるためには要とも云うべき役割を、この一帖が荷っている事実には気づかないわけにはいかない。

鈴虫巻は柏木死後の後日譚と云うべき巻で、事件と云う程のものは何もなく、出家後の女三宮と、それを見守る源氏の日常を語って、鈴虫の声が耳にしみとおるような抒情をただよわせた巻である。しかし単に後日譚であるだけではなく、ここで描かれた源氏の生活と、それを包んでいる平静な雰囲気とが、そのまま源氏最晩年の生活と心境に通うことによつて、冥々の中にエピソードの二帖を準備している。つまり、それ自身ではとり立てて云う程の内容を持たないこの巻は、若菜・柏木巻を御法・幻巻につなぐ役割を果たしていると云うことが出来る。そして巻の置かれた位置は、横笛巻と夕霧巻の間に、すなわち夕霧物語の布石がきわめて慎重な手つきで用意されおわり、いざ展開に移ろうとする瞬間、それを断ち切るような位置に置かれている。

鈴虫巻がその内容と位置とによつて示しているこの二様の働き、一方では第一のグループと第三のグループを結びつけ、一方では第二のグループをわざわざ中断することによつてその孤立性を弱めるといふ働きは、何を意味しているだろうか。いずれも同一の意図、すなわち三つのグループをこの一点において融合させ、それを一つの全体に形成しようとする意図を表明している。そしてこの一帖が後記挿入された巻であるとすれば、どういふことになるだろうか。三つのグループは本来発想を異にする別々の個体だったのであり、それを併せて第二部という一つの全体の外貌を呈するものに仕立てるためには、鈴虫巻後記挿入という一操作が必要だったと考えることが出来るのではないだろうか。試みに第二部の中からこの一帖を抜き去ってみると、そこには、右の操作が必要であると考えた作者の判断の正当さを立証するような光景が、すなわち三つのグループが互いに孤立したまま、不器用に並列す

る状態が、容易に想像されるのである。

鈴虫巻が後記挿入された巻であり、その意図がおおよそ右の如きものであるとすれば、少くとも第一のグループと第二のグループが、本来それぞれ独立した物語であったこと、最後の二帖が夕霧巻執筆後にはじめて発想されたものであることは、一応明らかになったと考えてよからう。しかし最後の二帖の発想が若菜・柏木巻とは本来無関係になされたものであることを確言するためには、もう少し言葉費す必要があるかもしれない。すなわち、この二帖が若菜・柏木物語のしめくりではないとすれば、他の如何なる意図に基いて発想されたか。答は実のところきわめて簡単である。御法、幻巻では第二部、と云うよりも桐壺巻以来の光源氏の物語の大団円が描かれているわけだが、それをそのまま受けとれば、作者は何らかの理由からここで、光源氏物語以来新しいモチーフを得ては次々と書きつがれてきた「光源氏の物語」に、終止符を打とうと考えたに過ぎない。そしてその理由については、光源氏にくらべると「唯世の常の人さま」であると、作者がわざわざことわっている、薰、匂の二人を主人公とする宇治十帖の構想が、この時既に出来上っていたためであろうと一応推理しておく。

右のような次第で、若菜・柏木物語と横笛・夕霧物語は、鈴虫・御法・幻三帖の後記添加により、形の上では源氏一代記の中に編入されることになった。先の玉鬘系の挿入と併せて、光源氏物語のテーマである源氏一代記のほかに、いわば見かけの源氏一代記が成立したわけである。これは、作者が光源氏物語における光源氏、と云うよりも光源氏物語によって読者の脳裏に形作られた光源氏のイメージを最大限に利用しつつ、その物語上の運動を進めていった以上、そして運動の各段階毎に、何らかの形でその結果を整理しなければならなかった以上（昔は短篇小説を集めて単行本にする習慣などはなかった）、作者にとっては止むを得ざる一種の手續きであったと考えることが

出来よう。しかしこの物語の成立過程に立ち会わない後世のわれわれにとっては、これは全くめいわくな手続きであった。見かけの一代記の成立によって、それぞれの物語は大なり小なり影響をこうむっているが、中でも被害の最も大きかったのは、原源氏物語と、この若菜・柏木物語である。原源氏物語は異質の要素を一手にひき受けることによって、若菜・柏木物語は、テーマの所在がつかみにくいという意味で、自体非常に難解な物語であったために、共に本来のテーマが見かけの一代記の中に拡散してしまつて、厳密に云えば、今日に至るまでその存在すら認められなかったのである。

## (二)

若菜巻上下は五十四帖の中でも特に長い巻で、柏木巻と合わせると岩波文庫にして一五〇頁ほどになり、これは原源氏物語十七帖のほぼ半分の長さに当る。その原源氏物語が、光源氏の一生を形作る様々な事件の集積から出来ていて、その事件と事件との間には必ずしも内面的なつながりはなく、いわゆる筋というものを持たないのに対して、ここではともかく一つの筋を中心にして物語が組み立てられている。

源氏の兄で先帝の朱雀院が、藤裏葉巻の六条院行幸の頃から持病が重り、出家を志しているが、それにつけては特に寵愛していた、母親のいない三番目の姫君の身の振り方を考えなければならぬというのが物語の発端である。女三宮は結局源氏の許に降嫁することになるが、婿えらびの際の候補者の一人であった柏木が懸想し、やがて紫上の病中で源氏の留守の時をうかがい密通に成功する。しかし事はすぐに源氏に知れて、これを気に病んだ柏木はそのために病死し、不義の子を生んだ女三宮は出家するというのが、主要な筋になっている。

一人の女性の結婚から破局に至るまでのいきさつが物語の経になっているわけで、その意味ではこれを女三宮物語と呼んでさしつかえないであろう。ところで右のあらすじからは、それが女三宮の降嫁、密通、出家という比較的単純な事件の経緯を追ったものであること、主要な関係人物が四人に限定されることなどから、密通事件をクライマックスとして緊密に構成された、或る劇的な物語が予想されるかも知れない。しかし実際にこの物語を読んでもみると、われわれの受けとる印象は劇的というものからおよそ遠いのである。当然劇的になっていい筈の筋立を持ちながら、むしろ甚だ劇的でない印象を与える、このくい違いの原因は何であろうか。その理由の一半は、先ずこの物語の筋の進め方に求めることが出来る。

若菜巻は現在上下に分れていて、それぞれ別名もついているが、これを分けたのが作者自身か、後人の手によるものかよくわからない。しかしこれが筋の段落による区分ではないことは確かである。上巻は例の垣間見の後で、柏木が女三宮付の女房から手紙の返事をもらったところで終っていて、下巻はその返事を読んだ柏木が、「道理とは思へども、うれたくもいへるかな」と感想をもらすところから始まっている。一続きの話の途中で切れているのである。そこで巻による区別は一応無視して、もっと内容に即してこの物語をいくつかの段落に区切ってみると、われわれは大変興味ある事実が気がつく。すなわち原源氏物語において物語の進行の立役者であったいわゆる年立が、この物語においても進行係としてまだ立派に生き残っていることを発見するのである。

女三宮が六条邸に降嫁することが決ってから薫を生んで出家するに至るまでの経緯を、作者はいくつかの段落にはっきりと分けて描いている。すなわち第一段、降嫁決定までのいきさつ。これは物語全体のプロローグに当る。第二段、宮の降嫁が六条院にもたらした波紋。主として紫上の心理的葛藤を通して描かれ、その克己と諦念によっ



て院内は一応「事なほりて目安くなむありける」という状態を回復する。第三段、柏木が宮を垣間見ること。垣間見の機縁となった猫を手に入れて悶々と日を暮すこと。云うまでもなく密通事件の前提である。第四段、紫上の大病、密通、露頭と堰を切ったように事件が相継ぐ。大結の場である。第五段、柏木の死と女三宮の出家。事件のいわば跡始末の段であり、柏木巻一帖がこれに相当する。

右のように事件の経緯の各段階を指摘することは容易に出来るのだが、これをそのまま物語本文の章分けに適用しようとする、どうしても無理が生ずる。と云うのは、この物語では、これらの各段階が連続して描かれておらず、源氏の四十の賀宴とか、明石の入道の消息など、本筋とは関わりのない出来事が段と段との間に大幅に席を占めているからである。女三宮事件の経過だけに頼って段落をつけようすると、これら六条院の日常生活や、第一部で旧知の人物達の消息に触れた、この物語の大きな部分の始末に当惑せざるを得ない。もともと作者が分けてもいない章を分けようというのがこちらの勝手であって、当惑するのもこちらの勝手みたいなものであるが、私は本文を見ている中に、「年もかへりぬ」という言葉がところどころ判で押したようにくり返されていること、この言葉と右の各段との間には或る関連があるらしいことに気がついた。すなわち事件の経緯を追った各段と年立の配分とがびったり一致するのである。次に、多少煩瑣にわたる嫌いはあるが、この物語の実際の「姿」を紹介する意味もかねて、物語本文の段落のあり様を一通り説明しておきたい。

プロローグに当る部分は先の第一段と全く重なるわけで、朱雀院の申し出を受け容れた源氏が、それを紫上に打明け、紫上が「空より出で来にたるやうなること」と観念して承認するまでと考えることが出来る。私が現在使用しているテキスト、日本古典全書版「源氏物語」(四)の四十三頁に、「(紫上は)今はさりともののみ、わが身を思ひあ

がり、うらなくて過しける世の、人わらへならぬ事を、下には思ひ続け給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。」とあって、次に「年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮、六条の院にうつろひ給はむ御いそぎをし給ふ。」と、ここで最初の「年もかへりぬ」が出てくる。

女三宮物語に即して云えば第二段の主題は云うまでもなく、現実には女三宮を迎えた紫上の内心の葛藤を描くことにあるのだが、このかえった年は源氏四十歳の賀の年に当り、章の冒頭は、正月子の日に髭黒夫人玉鬘がお祝の若菜を奉りに参上することから書き出されている。そしてその儀式の模様、式部卿宮や太政大臣らが参会して管絃の遊が行われた次第、玉鬘の伴った若君達を見て源氏が感慨を催すことなどがこまごまと語られた後で、女三宮興入の話に移るのである。紫上と女三宮の対面がおこなわれて、「事なほりて目安くなむありける」と主題部が語り終えられると、十月に紫上による嵯峨御堂楽師仏供養、その精進落しの祝宴、余興の舞楽、秋好中宮による諸寺への布施、その祝宴、勅命による夕霧の祝宴と、四十の賀の祝儀が相継いで、その描写はやはり、儀式の諸道具から贈物の目録に至るまで、委曲を尽している。つまり第二段は、源氏四十の賀の祝宴に明け祝宴に暮れて、その間に宮の興入とその後の成り行きが描かれていると云ってよいであろう。

第三段は「年かへりぬ。桐壺の御方近づき給ひぬるにより、正月朔日より、御修法不断にせさせ給ふ。」の一節から始まる（八一頁）。この年は桐壺の御方すなわち東宮女御明石姫君の出産のあった年で、そのいきさつから明石に隠棲する祖父入道の因縁話が長々と語られて、われわれが女三宮のことなど殆ど忘れてしまった頃に、やっと柏木が登場する。上巻のおわりから下巻のはじめにかけて柏木垣間見の一件が語られると、次に、かつて髭黒に玉鬘姫をしてやられ、宮を望んで得られなかった螢兵部卿宮が、髭黒の娘真木柱と結婚した話が紹介されて第三

段が終る(一二七頁)。この物語を仮に前後篇にわけるとすれば、ここまでを前篇と考えることが出来るだろう。何故なら、「はかなくて年月もかさなりて、内裏の帝御位に即かせ給ひて十八年にならせ給ひぬ」という次段の書出しとの間に、年立によれば四年乃至六年の空白があることになるからである。そして女三宮事件に焦点を合わせて云えば、前篇の三段によってこの物語は一応事件の条件を整えたことになり、後篇からその展開部に移る。

先の本筋の段別の時には、第三段の後にすぐ大詰の段を持ってきたが、ここではその前に、六年間が経過した後、冷泉帝の退位などで変動した公の情勢、人々の消息などを伝える比較的短い段を、第四段として認めることにしたい。「年の暮つ方は、対などにはいそがしく、こなたかなたの御營に自ら御覽じ入るる事どもあれば、春のうららかならむ夕などに、いかでこの御琴の音聞かむと宣ひわたるに、年返りぬ。」という一節でこの段は終る(一二四二頁)。

明けた年は朱雀院五十の賀の年である。前段の終りで、女三宮が里帰りの意味もふくめてその祝賀に参上することが話題になっており、その際宮の琴でも披露しようということとその練習を始めたことが述べられていて、第五段は、その予行の女樂が六条院で催されることから始まっている。参会した六条院の女達、女三宮は「わづかにしだりはじめた」青柳に、明石の女御は「よく咲きこぼれたる」藤の花に、紫上は桜に、明石の御方は五月待つ花橘にたとえられる。いずれ劣らぬ花々に取り囲まれて、この夜の源氏は幸福そのもののように見えるが、われわれがこうした源氏の姿を眺めるのも、桐壺以来の物語でこれが最後の機会である。のんびりした朧月夜の女樂の描写に引き続いて、その翌日の夜明け方の紫上発病を契機にして、物語が急テンポで展開することは既に述べた。始め二十月十余日と予定されていた山の帝の御賀は、事件の輻湊で延びに延びて、年もぎりぎりに押しつまった十二月二十

五日におこなわれた。そのことを告げて、「例の五十寺の御誦經、またかのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の。」と、第五段すなわち若菜下の末尾は終っている。年頭の女樂の華やかさにひきくらべて、その間の多事であった一年が六条院の内部にもたらした変化をはっきりと印象づける幕切れである。エピソードの第六段は、柏木巻一帖がそれに当る。その冒頭の一節が、「衛門のかんの君、かくのみなやみわたり給ふこと、なほおこたらで、年もかへりぬ。」と始まることを指摘すれば足りよう。

右の通り、この物語において筋の進行は、事件の展開によってではなく、年月の経過によって進められている。云いかえれば、この物語の構造の骨格をなしているものは、筋ではなくて年立であり、女三宮事件の経緯は、年月の流れの、或いは六条院の日常生活の流れの一齣一齣として断続的に語られているに過ぎない。これは作者が原源氏物語においてとった方法をそのまま踏襲したものと云ってよいが、もともと筋というものを持たない原源氏物語において、様々の人生的な事件を年月の流れのままに積み重ねることによって、人間の一生を彷彿たらしめることに成功した同じ方法は、このともかくも一つの筋を中心に組み立てられた物語においては、当然その筋の運びから劇的な緊張と盛りりと印象の統一とを奪う方向に作用した筈であり、この物語が女三宮の降嫁から出家に至る経緯を描いた物語であるとすれば、これは明らかに作者の方法上の大きな誤算だったと云わなければならない。

### (三)

本筋の中に本筋とはそれ程関係のない出来事の叙述がふんだんに挿入されている事実については、従来の若菜論でもしばしば問題にされており、例えば石田穰二氏は次のように述べておられる。「若菜巻は、朧月夜のこと、方々

による源氏の四十の賀、明石入道のこと、下の巻に入つて、住吉詣で、六条の院の女樂と、次々に絵巻物を展叙するにも似た場面が続いて、この巻の長大な展開を可能ならしめてゐる。この事を、いまわたくしは問題の外においてゐる。ただ絵巻物の、次にどういふ場面が出てくるか、わたくし達は、この若菜の巻といふ絵巻に対しては、絵巻全体として、一つの統一を求めない。絵巻的な事件と場面に、わたくしは見事な並列と展叙という印象を抱いてゐる。つまり場面と場面との間の必然的な展開とつながりを感じない。(中略) とういふ性格をわたくしはこの物語の古代的な古さとして理解しようと考えている。(若菜巻について、国語と国文学―昭11)。

しかし、この物語の中から女三宮事件にさほど関係のない部分を「古代(物語)的な古さ」として「問題の外におく」とすると、石田氏が右に例としてあげられたものだけでも、全体の三分の一から半分に近い叙述を切り捨てなければならぬ。しかもこの物語には氏が云われるように「絵巻全体として、一つの統一」がないわけではなく、既に見た通り、年立を中心にした或る種の統一が存在するのだから、われわれの勝手な切り継ぎは、このせつかく存在する統一を破ることになり、物語の構造そのものをゆがめる、乱暴な読み方だと云わなければならない。そこで問題は、作者は何故この物語において、このような構造を選んだかということであり、それに対して次のように考えることが、或いは一応の解答になるかもしれない。

武田氏の成立論によれば、作者は先ず紫上系の十七帖を書き、次に玉鬘系の諸短篇を書いて紫上系の中に挿入し、それによって成立した第一部の統篇として若菜巻の執筆にとりかかった。そして若菜・柏木巻が実質的には女三宮物語であるとすれば、一口に第一部の統篇と云つても、この物語は玉鬘系の短篇群の系列に属する物語であるとうことが出来るだろう。但し玉鬘系の場合は、それを挿入すべき母胎が背景にあつたが、藤裏葉巻以後の物語とし

て構想されたこの三帖にはそれが無い。従って純粹に女三宮物語としてまとめると、この物語は宙に浮いてしまうことになる。そこで作者は六条院の日常生活や第一部、特に紫上系で活躍した人達の消息にしきりに筆を費すことよって一代記の続篇という体裁を保ち、その流れの中に女三宮物語の経緯を織り込んでいった。

しかしそれにしては本筋以外の部分、つまり体裁をつくらせた部分が多過ぎはしないだろうか。又、一代記の続篇的部分が単に体裁を保つためだけのものであるとすれば、石田氏の云われるようにこれらをすべて無視してしまつても一向にかまわないわけであり、それならば年立によるこの物語の統一的構造とは何であるか。単なる作者の物好きとでも考へるほかはあるまい。しかしこの物好きは、先にも述べたようにいわば年立的秩序とでも云うべきものを、現実には作品の世界に与えており、これは女三宮物語の筋的秩序にとつて、極めて有害に作用している筈である。作者は何故この物語の根底に年立を据えたのか、問題はそのまま残ってしまったと云わなければならぬ。

ここでこの年立という言葉について、簡単に注をつけておく必要がある。普通に源氏年立と云われるものは、物語中の諸事件と源氏を始め各登場人物の年令とを対照させた一種の年表の如きもので、云うまでもなく作者自身の作製したものが残っているわけではなく、後世の研究家の手に成るものである。従つて五十四帖の全体を通して年立が立てられるからと云つて、この三帖における如く、或いは原源氏物語における如く、この物語の他の部分においても、年立が作者の製作機構に深く参与していたとは限らない。原源氏物語で年立が物語進行の立役者であるということも、実はこの三帖における程整然とした形で、と云うことは年月の経過と事件の推移とがびったり歩調を合わせるという工合に、はっきりと物語の表面に現われている事実ではない。年立表を算定するには、人物の年令が明記されたわずかな箇所を手がかりにするわけだが、原源氏物語の場合そうした箇所は、最初の桐壺巻に二、三

源氏の年令が記されているほかは、最後の藤裏葉巻に「明けむ年四十になり給ふべければ云々」と一箇所あるのみで、後は若菜巻に入つて「二十がうちには納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、云々」という朱雀院の言葉や、紫上の年令などいくつか集つて見出されるに過ぎない。しかし物語の始めと終りにあるこれだけの手がかりをもとにして、その間の諸事件について細部に至るまでほぼ矛盾なく年立表を作製することが出来るということ、それが偶然の暗合でない限り、作者自身この年立表の如きものを基礎にして作品を組み立てていったのだと考へるほかはなからう。そして一貫した筋を持たない原源氏物語の場合、その錯綜する事件と人物とを適宜配分し、一つの渾然たる全体を構成するための唯一の設計図、つまり作品のプロットが年立であつたという推定を、われわれは素直に受け容れることが出来るのである。それでは原源氏物語以後の物語においてはどうか。

玉鬘物語を除いて玉鬘系諸短篇が年立を顧慮する必要がなく、事実そのようなものが作品の構成に何の影も落していない事は説明の要があるまい。若菜・柏木物語の次に位する夕霧物語においても事情は全く同様である。これらの物語は、原源氏物語及び若菜柏木巻との関連から、それぞれがあつた事件の時期を源氏年表の中に位置づけることが出来ると云うに過ぎない。ところで宇治十帖は、右の諸短篇と違ってかなり長年月にわたる物語であり、後世の年立は、これを薫十四歳から二十八歳までの期間と算定している。しかしこの場合は算定の仕方が先に述べた原源氏物語の場合と異り、その基準となる数字の明記された箇所が、匂宮巻に「十四にて、二月に侍従になり給ふ」、同じく「十九になり給ふ年、三位の宰相にて云々」、橘姫巻「心寄せ仕う奉り給ふこと、三年ばかりになりぬ」と、物語の始めの方にしかない。あとは物語の展開につれて、春夏秋冬の推移が読みとれる、それを累算して推定したに過ぎないのである。そして物語の内容を検討しても、この作品のプロットは明らかに筋であつて、その筋の

展開に何らかの形で年立的考慮が加わっている形跡は全く認められない。次に念のため岩波文庫本の目次を引用しておく。もちろん或種の近代小説のように、時間の流れをひっくり返したり、重ね合わせたりするようなことはなく、大体時の自然の経過に従って筋が運ばれていくのだが、事件と年月との間に「年もかへりぬ」式の整合など見られないことは、これによって一応うかがうことが出来よう。特に、早蕨と宿木の間、蜻蛉と手習の間に、わずかだが年月の逆行、重複が見られる点は注目してよい。なお偽作説、巻序浮動説のある紅梅・竹河両巻は除外した。

句宮(鶯齡一四〇二月、正月)、橋姫(二〇〇二月、冬)、椎本(二三三二月、二四・夏)、総角(二四・八月〇十二月末)、早蕨(二五・春)、宿木(二四・夏〇二六・四月)、東屋(二六・八月〇九月)、浮舟(二七・正月〇三月末)、蜻蛉(二七・三月末〇秋)、手習(二七・三月末〇二八・四月)、夢浮橋(二八・四月)。

以上述べた通り、筋というものを持たない原源氏物語においては、筋に代るものとして年立が作品のプロットに採用されている。プロットとして筋を持っているその他の物語においては、年立に対して何らの顧慮も払われていない。要するに、それぞれの物語の本質に応じて、それに適した物語構造がとられているわけで、作者は決して必要以上に、純源氏一代記の年立的プロットに義理を立てたりはしていないのである。実に当りまえの話と云わなければならぬ。

それでは若菜・柏木の三帖に限って、当りまえのことがおこなわれなかったであろうか。おそらくそうではあるまい。先に指摘したようなこの物語の構造的特徴は、やはりこの物語の本質が要求したものに相違ないのである。そこで次のように云うことは出来ないだろうか。一代記の続篇的要素が必要以上に女三宮事件の経緯に割りこむことを許したのは何故か。この物語が女三宮事件の経緯を描くことを目的にした物語ではないからである。又、物語



の根底に年立を据えたのは何故か。それ以外に物語を統一する手段がなかったから、云いかえれば、原源氏物語同様、この物語にも筋と云い得るものが存在しないからである。

要するにこの物語の構造的特徴が指示する方向は、われわれを、この物語は女三宮事件の経緯を語った物語ではなく、女三宮事件の経緯は、実は物語の筋ですらないのではないかという見当に極めて自然に導くのだが、この見当は、以下に述べるように物語の実際によって容易に裏付けを与えることが出来る。女三宮の降嫁によって始まり、密通事件を経て、宮の出家と柏木の死によって終るいきさつは、一見整然とした筋を構成しているかに見えるが、この物語の中から非本筋的部分を取り除いて、残りをつなぎ合わせてみても、女三宮物語は出現しない。事件の経緯を追ったかに見える先の各段は、単に断続的に語られているだけではなく、その間に一篇の物語を構成し得るだけの有機的なつながりを持っていないのである。

#### (四)

女三宮事件の展開の仕方から受ける印象を、先に劇的でないという言葉で説明したが、もちろん劇的效果は筋の単一性や進行の速度などだけから生ずるものではない。基本的には人物相互間の対立、葛藤の關係がそれを生み出すので、この物語の場合も、事件の進行の仕方もさることながら、実は物語の主要人物、女三宮、柏木、源氏、紫上の間に、真の対立關係が設定されていないという点に、即ち事件の設定の仕方そのものに、そうした印象の由来するもっとも本質的な理由を見出すことが出来る。

女三宮の降嫁から出家までのいきさつをつなぎ合わせてみると、その間の事件の推移に、物語の山、或いは当然

山となるべききっかけが二度あったことがわかる。第一の機会は、宮の降嫁そのものもたらしたもので、そのテーマは源氏をめぐる紫上と女三宮の対立である。第二の機会は、柏木の密通がもたらしたもので、云うまでもなく女三宮をめぐる源氏と柏木の三角関係である。この二つの機会は、いずれも結局単に機会であるにとどまって物語の山と呼び得るほどの発展をとげるには至らなかったわけだが、これらの三角関係が真の劇的葛藤を生まず、いわば不発に終らざるを得なかった経路には、両者に共通した特性が認められる。およそ対立というものが生じ得るためには、対立すべき人物の間に、何らかの意味で均衡が成立していなければならぬが、この物語の三角関係には、紫上と女三宮、源氏と柏木の間にならぬ条件が全く欠けている。始めから与えられていないのである。

第一の三角関係で、そのような均衡が成立すべき場は、云うまでもなく源氏の心内であるが、そこで紫上と女三宮の立場の優劣は、はじめから決定されていたと云ってよい。既に降嫁決定の直後、そのことを紫上に告げわづらっている源氏の独白に、次のような一節が見出される。

この事をいかに思さむ、わが心はつゆもかはるまじく、さる事あらむにつけては、なかなかいと深さこそまさらめ、見定め給はざらむ程、いかに思ひ疑ひ給はむ。（四一頁）

宮の降嫁によつて三角関係の如きものが成立するかに見えるのも、紫上が源氏の心中を見定めぬ期間の一時的現象、或いは紫上の描く空中楼閣に過ぎないことを、物語のはじめに当ってはっきりと予告したようなもので、事実その後のなりゆきは、この予告を忠実になぞっていくに過ぎない。女三宮に対する源氏の初対面の印象は、次の如きものであった。

姫宮は、げにまだいとちひさく、かたなりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみにち若び給へり。かの紫

のゆかり尋ね取り給へりし折思し出づるに、かれはされていふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見え給へば、よかめり、憎げにおしたたる事などはあるまじかめり、と思すものから、いとあまり物の榮なき御様かな、と見奉り給ふ。

(五一頁)

はじめから大した期待も抱いていなかったものの、実際に対面してみると改めて「物の榮なき御様かな」と思わずにはいられなかったのである。「紫のゆかり尋ね取り給へりし折云々」と殊更に「かれ」と「これ」とを対照させている点に作者の意図をうかがうことが出来る。そして当時のしきたり通り「三日が程は、夜がれなく渡り給ふ」につけても、紫上の物思いに沈んだ様子を見ては、

などで、よろづの事ありとも、また人をば並べてみるべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわがおこたりに、かかることも出でくるぞかし(五一頁)。

と、源氏はのっけからこの結婚を後悔しなければならなかった。もう一例だけ引用しておこう。「などでかくおいらかに生ふし立て給ひけむ、さるはいと御心とどめ給へる御子と聞きしを」と、源氏が朱雀院のしつけのゆるやかさを非難するのに続いて次のような一節がある。

昔の心ならましかば、うたて心おとりせましを、今は世の中を、皆さまさまに思ひなだらめて、とあるもかかると、際離るる事は難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありけれ、余所の思は、いとあらまほしき程なりかし、と思すに、さし並び目かれず見奉り給へる年頃よりも、対の上の御有様ぞなほあり難く、われながらもおふしたてけりと思す。一夜の程あしたの間も恋しくおぼつかなく、いとどしき御志のまさるを、などかく覚ゆらむと、ゆゆしきまでなむ。(五九頁)

「さる事あらむにつけては、なかなかいとど深きこそまさらめ」と源氏の予想したことが、予想をはるかに上廻る深刻さで実現したわけである。

こうして源氏の心の秤が紫上の方に傾き切っている一方、女三宮の人柄や年令は、「ただ児の面嫌せぬ心地して、心やすくうつくしき様し給へり」、或いは「ただ聞え給ふままに、なよなよと靡き給ひて、御答なども、覚え給ひけることは、いはけなくうち宣ひ出でて云々」という、ものほかない有様であった。紫上に対する競争意識など毛頭なく、二人の対面がおこなわれることになって、源氏からその場の心得を云い聞かされても、「はづかしうこそはあらめ。何事をか聞えむ」と心配するだけの、かわいらしい姫君に過ぎない。これではどのような点から云っても三角関係などが成立する余地はないので、女三宮降嫁の波紋が、単に紫上の内心の劇として描かれ、そのいわば一人相撲に終らざるを得なかつた所以である。

第二の、と云うよりも女三宮物語にとつて当然クライマックスであるべき三角関係も、右と全く同様の経過をたどつて流産する。密通がおこなわれた直後の女三宮について、語り手は次のように述べている。

かぎりなき女と聞ゆれど、すこし世づきたる心ばへまじり、上はゆゑあり兎めかしきにも、従はぬ、したの心添ひたるこそ、とあることかかるとにうちなびき、心かはし給ふ類もありけれ、これは深き心もおはせねど、ひたおもむきに物懼し給へる御心に、ただ今しも人の見聞きついたらむやうに、まばゆくはづかしく思さるれば、あかき所にだにえゐざり出で給はず、いと口惜しき身なりけり、と、自ら思し知るべし。（二七九頁）

源氏の心に新しい女性の割込む隙間がなかつたように、ここでは、内気で小心な女三宮の性格に、浮気とか密通とかを受け容れる素地の全くなかつたことを云っているのである。更に次のような一節がある。

かの人柏木は、わりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見奉りけれど、宮、つきせずわりなきことに思したり。院をいみじく懼ち聞え給へる御心に、有様も人の程も、等しくだにやはある。いたく由めきなまめきたれば、大方の人目にこそ、なべての人にはまさりてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御有様に、ならひ給へる御心には、めざましくのみ見給ふ程

に、かくなやみわたり給ふは、あはれなる御宿世にぞありける。(二八九頁)

事件後しばらく経って、柏木の人柄を見定めるだけの余裕を取りもどした女三宮の目に、柏木は光源氏とはくらべものにならない程卑小な人物に映ったというのである。

先にも述べたように降嫁後の女三宮は、周囲の感情的軋轢には全く没交渉で、紫上の対立意識も源氏の失望感も、宮の内心には何の痕跡も残さないまま事態が收拾されている(第二段)。女三宮が六条院の生活に不満を持たなければならぬ理由は何一つなかったわけで、女三宮の側に事件を招来するような積極的な条件がない以上、事件の経過は専ら柏木の側の一方的な恋愛・密通として描かれるほかはない(第三段・柏木の垣間見)。その上密通の結果が右に述べたようなものであるとすれば、この事件の実体は、やはり柏木の一人相撲でしかなかったと云わざるを得ないだろう。女三宮にとっては、この事件は、事件というよりも単なる事故でしかなく、その結果懐妊という純粹に生理的な事実だけが残って、「かくなやみわたり給ふは」、全く「あはれなる御宿世」としか云い様がないのである。

中年の夫と情熱的な恋人との間に用意された女三宮にとっては絶好の舞台も、こうしてむなしく放棄されるわけだが、第一部で理想的人格として造型された光源氏と白面の柏木では、所詮釣合いの取りようがなく、それが作者の意に反して物語の劇的展開を妨げたとは考えられない。両者の人格の絶対的な比重が問題なのではなくて、この場合も均衝の成立すべき場は女三宮の内心であり、そこで、柏木の新鮮な情熱が源氏の父親的な愛情と拮抗し得ない理由はない筈だし、それが人形のような女三宮の中に眠っていた「女」を呼びさますきっかけとなってわるい道理もないのである。

作者にその意図さえあれば、この状況で女三宮を生かすのにはそれほどめんどうな手続きは必要としなかった筈で、例えば、宿木巻で突然登場する浮舟について、その後どれだけの性格描写或いは心情描写がなされているだろうか。匂宮に心をかけたことを暗示する一行か二行が、浮舟を宇治十帖のヒロインにしたので、女三宮の場合、その一行を欠いたために、密通事件は宮にとっても読者にとっても、単なる事故に過ぎないものとなり、ひいてはその出家という結末も、悲劇としての必然性を全く失うことになった。

密通が夫に知れ、不義の子まで生まれるのだから出家する理由に不足はないが、その理由を必然化するだけの演技の余地が、女三宮には与えられていない。この物語を女三宮物語として読む限り、鳴物入りで登場した主役が、舞台を素通りしただけで幕が降りてしまったような、何とも奇妙な印象を免れることが出来ないのである。

事件の経緯をつなぎ合わせても女三宮物語は出現しないと云ったのは、およそ以上のような意味合いからだ、次にその事件の経緯に物語の筋と呼べるだけの一貫した内面的連絡がないことについて、一通り説明しておきたい。

### (五)

前章で述べた経過で明らかのように、密通事件が、柏木の恋愛・密通・死という一方的な行為としておこなわれ、女三宮やその他の人物はその巻きぞえをくったに過ぎないとすれば、事件の経緯に内面的なつながりがあるかないかということは、この物語は、柏木の悲恋物語としてならば一篇の物語としての体裁を備えているかという問題に帰着する。そこで先ず気がつくことは、柏木物語が始まるのは垣間見の段からであって、事件の経緯に関する限り、この物語は第二段と第三段の間で事実上筋が途切れていることである。

女三宮の降嫁が決定するまでのいきさつを詳細に語った第一段は、この物語のいわばキイポイントとして近年の若菜論で重視されている部分だが、この段の叙述が女三宮の六条院への降嫁を必然化するためのものであるにせよ、<sup>註1</sup>或いは婿選びにおける朱雀院の錯誤を立証するためのものであるにせよ、<sup>註2</sup>いづれにしても柏木の密通とは何の關係も持っていない。朱雀院の錯誤ということは、この物語の不幸な結末とは結果論的に対応するかも知れないが、事件の直接の原因である柏木の心事や行為にまで、朱雀院が責任を負う必要はないのである。柏木はこの段で求婚者の一人として名前だけ出てくるが、その求婚の意志も、「この衛門の督の、今まで一人のみありて、御子達ならずは得じと思へるを、かかる御定ども出できたなる折に、さやうにもおもむけ奉りて、召し寄せられたらむ時、いかばかりわが為にも面目ありてうれしからむ」(三〇頁)と、主として父太政大臣の意向として述べられるに過ぎない。宮を聞え外したことが事件の一件件であると云うならば、この物語はこの段階では、螢兵部卿物語にも、藤大納言物語にもなる可能性を保持していたわけである。

女三宮の降嫁が六条院にもたらした波紋を描いた第二段が、事件と何の關係も持っていないことは既に述べた通りで、要するに第二段までの物語で、と云うよりも若菜上巻の末尾近く柏木が突然登場するまでの物語で、柏木の片思いを暗示したり、密通事件を準備したとみなされるような叙述は一箇所も存在しない。柏木の登場に当って、その恋の由来を一通り解説した、次のような一節があるのはそのためである。少し長いが全文を引用することにする。

衛門の督の君も、院に常にまあり、親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあかめ奉り給ひし御心掟など、くはしく見奉り置きて、さまざまの御定ありし頃はひより聞え寄り、院にもめざましと思しのためはせずと聞き

しを、かくことさまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地すれば、なほえ思ひ離れず。その折より語ひつきにける女房の便に、御有様なども聞き伝ふるを、なぐさめに思ふぞはかなりける。対の上の御けはひにはなほおされ給ひてなむと、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせ奉らざらまし、げに類なき御身にこそあたらざらめと、常にこの小侍従といふ御ちぬしをも、云ひ励まして、世の中定なきを、大臣の君もとより本意ありて、思し掟てたる方におもむき給はばと、たゆみなく思ひありきけり。（一〇七頁）

女三宮降嫁の波紋が「事なほりてめでたくなむありける」と一通り静まった後の六条院には、少くとも表面的には、従前通りの平和な歳月が流れる筈であった。この一節はその日常的な時間の中に、物語の外側から突然小石を投げこんだようなものであり、その後の事件は、柏木の一方的な行為及びその結果として、すべてこの一節を起点として展開する。つまりこの物語を事件の展開という面から眺めると、女三宮の降嫁を中心とする波紋と、柏木の懸想を中心とする波紋にはっきりと二分され、二つの波紋は互に全く触れ合うことなく弧を描いていると云わなければならぬ。

もっとも、宮の降嫁による紫上の心労が積り積って後の大病を誘発し、それが柏木に密通の機会を与えたという風に解釈すれば、二つの波紋、前章で用いた言葉を使用すれば第一と第二の三角関係は辛うじてつながりを持つことになる。しかしこれはわれわれの「解釈」であって、物語自身は一言もそうは云っていない。物語の語っていることは、この大病の原因は六条御息所の物怪のせいだというのであり、これも一つの「解釈」に過ぎないかもしれないが、この場合物怪説をそのまま受けとっておく方が、つまり紫上はたまたま大病にかかったのであり、その偶然が柏木に密通の機会を与えたと受けとっておく方が、少くとも、六年の間紫上の一人相撲が続いていたと考える



よりは、後に云うこの物語の一種独得の現実感を損うことが少いように思われる。

ところで右に引用した一節によれば、柏木は宮を垣間見る以前から、源氏が本意を遂げて出家するようなことがあったならばと、あまり当てもならないことを当てにしてたゆみなく思ひありくほど、宮を思いつめていたことになっている。従つて垣間見事件が柏木の恋の契機として語られる筈はないので、「覚えぬ物の隙より、ほのかにそれと見奉りつるにも、わが昔よりの志のしるしあるべきにやと、契うれしき心地して云々」(一一三頁)と、柏木が「わが昔よりの志」を確認した出来事として描かれる余地しかない。恋愛に至るまでの過程は、右の一片の「説明」がすべてを引き受けているわけで、つまり柏木の恋愛は、その最も重要と思われる部分が物語の一部として造型される労が省かれ、物語の圏外の既成事実として、その結果だけがいわば報告されるに過ぎないのである。

しかもその「説明」だが、柏木の求婚の動機については、先に引用した「御子達ならずは得じと思へるを云々」という太政大臣の言葉などでおおよその察しはつく。そして「かやうにも思し寄らぬ姉官達をば、かけても聞え悩まし給ふ人もなし」(三〇頁)とあるように、御子達の中でも特に院や帝の寵愛の厚い姫宮を得たいと望むのが人情であり、柏木もその例にもれなかつたことは、「この宮を天帝のかしづきあがめ奉り給ひし御心掟など、くはしく見奉り置きて云々」(前掲引用文)とあるのによつて察しがつく。しかしそうしたいわば功利的な求婚の動機が、女三宮ならずは得じ、という情熱にまで昇華した過程については、「かくことさまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地すれば、なほえ思ひ離れず」(同右)とあるだけで、全く省略されている。省略と云うよりも、この場合昇華の機縁となるべき事実がそもそももない筈だから、宮を聞え外した口惜しさと、源氏の出家の時期を待つても宮を得たいという、明らかに次元の異つた心情とを強引に結びつけた、かなりいいかげんな「説明」だと云つてよいであ

ろう。

従つてこの後、女三宮に対する源氏の処遇が不当だと云つて夕霧と議論したり垣間見の機縁となつた猫を手に入れてかわいがつたり、柏木の情熱的な身ぶりがどれほど強調されても、それがこの物語の主題乃至は主題の一部として、自己目的的に語られているとは受けとりにくい。逆に云えば、この段の柏木の心情や行為は明らかに動機不十分と云わなければならぬのだが、このような登場の仕方によつて受ける印象から、われわれは動機不十分とがめ立てするほどにも、この人物に対して注意を払わないで読み過しているというのが実状である。

右のような次第で、六条院の生活史の中にぼつんとはさみこまれたこの段の叙述は、密通事件の伏線以上のものとは受けとれないのだが、この後柏木は、事件の直前に「まことや、衛門の督は中納言になりにかかし」と語り出されて、女三宮の異腹の姉、女二宮を得たことなどが報告されるまで再び物語の舞台から姿を消し、その間に六年が経過したことになっている。経過したことになっていると云うよりも、降嫁の前年に「その程御年十三四ばかり」だった女三宮の年令が、事件の年には「二十一二ばかりになり給へど云々」とあつて、物語上実際にそれだけの年月が経過しているのである。この年月の経過を念頭に置いてこの物語を読む限り、六年前のはかない垣間見などは、伏線としての効果も殆ど失つてしまった筈だと思わざるを得ないのだが、それにもかかわらず作者は、六年間の柏木の心情の推移については一言も触れず、その恋愛の、ということはその密通の動機について、次のような「補足的説明」をつけ加えているだけである。

なほかの下の心忘れず、小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従の乳母の女なりけり、その乳母の姉ぞ、かのかんの君の御乳母なりければ、早くより氣近く聞き奉りて、まだ宮幼くおはしましし時より、いと清らになおおはします、帝のかしづ

き奉り給ふさまなど、聞きおき奉りて、かかる思もつきそめたるなりけり。(二六九頁)

柏木の乳母と小侍従の母とが姉妹だったとは初耳で、たしか前の「説明」では「その折より語ひつきにける女房の便に云々」とあった筈だが、ともかくこれだけの「説明」で柏木には密通の動機があることになり、この小侍従という軽率な女房の手引きで密通事件は実現する。しかし事件の結果は、柏木に関する限り、密通という事実が残っただけで簡単に事が露頭し、柏木は源氏の一にらみにあって悶死する。以上が柏木という人物の死に至るいきさつについて、この物語が語っていることのすべてである。

要するに柏木の恋愛は、恋愛が成立するまでの過程、密通に至るまでの過程がすべて省略され、恋愛・密通・死という個々の出来事として、六条院を舞台とする物語全体の流れから孤立して、断片的に語られているに過ぎない。そしてこれがとりもなおさず事件の経緯のすべてであって、このような柏木に関する叙述が密通事件の伏線以上のものとは受けとれないとすれば、事件そのものも、それがもたらすべき何らかの結果に対する物語的設定以上のものではないのであり、柏木の恋愛・密通・死といういきさつにいきさつと呼べるほどの脈絡もないとすれば、事件の経緯そのものが、実は経緯でも何でもなく、個々の出来事の単なる羅列に過ぎないことを意味している。

ところで以上に紹介した、柏木に関する叙述は、それが伏線に過ぎないとしても、あまりにもあからさまで、不器用で、非効果的な伏線ではないだろうか。しかしこれは、恐らく作者の意図通りの結果なのであって、第三段と第四段の間に置かれた、例の四年乃至六年の空白期間が、そのことを端的に物語っているように思われる。四年乃至六年と云うのは、第三段の末尾で螢兵部卿官と真木柱の結婚したことが紹介され、あまり夫婦仲のよくないまま「さ云ひつつも、二年ばかりになりぬれば云々」とある。その「二年」を空白期間にふくめるかふくめないかの相

違である。私はこの空白期間の存在理由についていろいろと考えたが、第三段までで一応形だけは整ったかに見える密通事件の条件が、この六年の間に固定し、硬化して、事件の条件としての機能を実質的には失ってしまうこと以外、その意義を考へることが出来なかった。六年という年月は、紫上の心労と大病の間を断ち切り、柏木の垣間見と密通の間を断ち切るのに十分な年月であり、この（少くとも事件の展開に関する限り）無用にして有害な空白期間の設定は、女三宮事件の経緯が何らかの心然の糸でつながって「筋」になることを許すまいとする作者の意図を、はっきりと物語っているように思われるのである。

(1) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章——「若菜」巻冒頭をめぐる——」（慶応義塾大学国文学研究会編、国文学論叢集三輯所収）

(2) 今井源衛「女三宮の降嫁」（文学・昭30・6）

## (六)

作者は原源氏物語以後、空蟬、夕顔、末摘花、玉鬘と次々に新しい女主人公を登場させ、その女主人公を中心とする一連の物語を書き続けてきた。従って当時の読者は、玉鬘の登場で始まった物語が玉鬘物語になったように、女三宮の登場で始まったこの物語が女三宮物語になることを当然予想したのであろう。しかし以上に述べたような次第で、この物語の中から事件に関係のない部分をすべて取り除いても女三宮物語は出現しないし、女三宮の降嫁から出家に至るいきさつには、その間にいきさつとか筋とか呼べるだけの最小限度の心然性も認め得ない。先にこの物語の主要人物は女三宮・柏木・紫上・源氏の四人に限定されると云ったが、どうやら物語の主題は、若菜巻から

新たに登場した若い二人の側にはなさそうである。

阿部秋生氏に「紫の上の出家」(慶応義塾大学国文学会編・国文学論叢第三輯所収)と題する一文があるが、これは女三宮や柏木が第二部の主人公とは認め難いことを指摘した、私の知る限りでは唯一の文章であり、又紫上の出家に至る過程が的確に追求されている結果この物語の主題に対しても或る正確な暗示を与える、すぐれた論文である。阿部氏はそこで「第二部は六条院——源氏と紫の上とを軸とした生活の中に起った事件を語ってゐるものであり、第一部に語られて来たやうな、世にもめづらしい異常な事件ではない。事件の展開——それからそれからといふ興味が全くないわけではないが、さうした興味を中心として語ってゐるものではない。第二部の話題の中心は、この女三の宮事件とその後の物語に捲きこまれた人物の心情の揺れ方を語ることにあつたものとみななければならないのであらう。」(前掲書二三三頁)と云われ、そうした観点に基いて、殆ど心情描写のほどこされていぬ女三宮よりも、その心理や感情の揺れ方、出家に至るまでの心境の推移が、より細かく丁寧に描かれてゐる紫上の方が、若菜以降の物語の女主人公としてふさわしいものと考えておられる。もっとも氏は、「だが、紫の上を第二部の女主人公とし、その心情の推移を語ることが第二部の関心事であつたとすると、女三の宮事件とは、紫の上はこの心情の転換を将来するための物語的設定なのか、ということになるが、そう断定してしまふことは案外困難である。殊に、紫の上の心情を語ることが第二部の主題であるといふやうなひ方をするならば、それは明かに行き過ぎた判定だといはねばなるまい。何故ならば、女三の宮事件によつて、大きな被害を受けるもう一人の人物——六条院の源氏がゐるからである。」(三十五頁・傍点筆者とも云つておられて、紫上の出家の過程を語ることだけがこの物語の主題であるとは考えておられない。これは当然あるべき断り書きであつて、先にも云つたように女三宮事件と称するもの

は、女三宮の降嫁事件と柏木の密通事件にはっきりと二分され、紫上の「心情の推移」は後者とは全く無関係だからである。しかし右の引用文、特に傍点をほどこした一節から推して、女三宮の降嫁による紫上の心情の揺れと、柏木の密通による源氏の心情の揺れとを語ることがこの物語の「関心事」、或いは「第二部の話題の中心」であった、という風に云うならば、およそ氏の考えておられることに近いであろうか。

第二部の物語が事件の展開そのものよりも、事件のひき起した波紋を語ることに重点が置かれているという氏の所説は、確かに、従来の若菜論を少くとも九〇度は転換させる卓説と云ってよいであろう。ただそこに至る推論の過程には異論の余地がなくもないので、例えば、第一部の物語が「世にもめづらしい異常な事件」が次から次へと展開する興味を中心にして組み立てられているのに対して、第二部の物語は（第一部に比べると）「甚だしく日常的な事件」を語っている、という見解などはどうであろうか。或る物語が事件の展開を主題としているか否かという問題に対するアプローチとして、その事件の性質が、「日常的」か「反日常的」かという問題の立て方自体に既に疑問の余地があるように思われるが、仮に氏の立論の線にそって云えば、第一部の諸事件も、一王朝貴族の一生に起った、甚だ日常的な諸事件であると云わなければならぬ。そこで描かれているのは、光源氏の初恋であり、青年期の奔放なロマンスであり、中年の浮気であり、極楽往生を願う老いらくの心境である。或いは初冠であり、新枕であり、夫婦の死別であり、仕事のつまずきであり、再起であり、息子の恋愛である。出逢い、別れ、死、愛情、嫉妬、物怪、夫婦喧嘩から姦通に至るまで、この世の一切はここにあり、この世ならぬものは何一つない。又、この物語に登場する女性達は、固有名詞を持った個性であるよりも、光源氏の正妻であり、第二夫人であり、かりそめの恋の対象であり、或いは初恋人であり、永遠の恋人というイメージであり、先妻であり、後妻であり、青年

期の或る時期の年上の恋人であり、中年の話し相手である。つまり光源氏の対女性史におけるそれぞれの機能とその属性として造型されている。従ってそれらの相手役たる光源氏そのものも、個性とかタイプとかであるよりも、その都度夫であり、浮気男であり、恋人であり、父親であり、そのいずれでもあるとすれば、単に「男」であると言った方が実際の印象に近い。つまり普通に「男」というものは云々」と云われる、その「男」というものとして造型される結果になっているのである。そしてこの「男」と「女達」が織り成す人生の種々相が、その間に何らかの脈絡を保って、「展開する」のではなく、実人生と同じように、時間の流れのままにただ継起することによって、「光源氏の一代記」と云うよりも、或る典型的な「男の一生」というものが、われわれの眼前に彷彿とする。つまり無数の人生の断片が時間という唯一の統一原理によって、断片のまま寄り集って一つの全体を形成した時、われわれがその全体から受けとる印象は、光源氏という輝やかしい超人的な人物の物語でもなければ、「世にもめづらしい異常な事件」の連続でもなく、これが人間の一生かという、甚だ一般的で平凡な感慨なのである。そして第一部(厳密に云えば原源氏物語)における作者の関心事は、まさしくこの「全体」にあったと思われ、それを構成する無数の事件は、それだけでは単なる物語の断片でしかない。その意味で原源氏物語は、無数の事件から成ると同時に、事件と云えるものは何一つ起っていないと云っても差し支えないであろう。誕生から六条院の造営まで何十年かの年月が流れて、光源氏はただ年をとっただけである。

それに対して第二部のはじめの三帖は、姦通ということが当時の社会にとって異常な事件であるかどうかということには関わりなく、女三宮の降嫁によって始まり、宮の出家と柏木の死によって終るといふその形式自体は、ともかく一姦通事件のいきさつを語った事件小説の外観を呈している。従ってそれが外観に過ぎないことを云うため

には、やはり物語の語り口に即してそれなりの実地検証の手續きを踏む必要があるであろう。

そうした意味で、これまで私が長々と述べてきたことは、氏の見解のいわば裏付けに過ぎないのだが、その裏付け作業を通して云えば、この物語が女三宮事件の展開を主題にした物語ではないという氏の見解の否定的側面には、全面的に賛意を表することが出来る。そして物語の力点が事件そのものよりも、広い意味で事件のひき起した波紋の方に置かれているらしいということも容易に見当がつくのだが、その波紋を「作中人物の心理や感情の揺れ方」という風に限定し、その「心理や感情の揺れ方」を語ること自体がこの物語の「関心事」であったと想定することになると、実はいささか首をひねらざるを得ないのである。

女三宮降嫁の波紋が紫上のいわば内心の劇として展開することは既に見た通りで、その心理描写は、たしかにかなり克明に、十分読者の共感を誘うべく語られている。しかし、これも既に見た通り、その心理的葛藤が結局は紫上の一人相撲に過ぎないことが最初から読者の目に明らかであるように物語が仕組まれている以上、その心理的葛藤を描くこと自体が第二段の主題であったとも、簡単には受けとりにくいような気がする。又、密通事件の結果が、柏木と女三宮にとって密通という事実が残っただけで、当事者二人に関する限り、いわば物語の舞台から消え去るための物語的設定であったとしか思えないのに対して、事件を知った後の源氏の複雑な心理状態については、驚くべきほど正確な筆致で、克明な描写がなされている。しかしその心情描写自体が直ちにこの物語の主題乃至は主題の一半であるかと云うと、やはり首をかしげざるを得ない。何故ならば、源氏にとって女三宮の事故は、愛情の問題ではなくて、結局のところ面子の問題に過ぎないからである。この事件が源氏にとってショックな出来事であったことは云うまでもないが、例えば紫上の大病による周章狼狽ぶりに比較すれば、源氏の受けた心理的打



撃の規模は云うに足りない。非常に不愉快な出来事だったが、要するにそれだけの話に過ぎないのである。従って事件を知ってから、「恋の山路はえもどくまじき御心交りける」(一九八頁)というところに落着くまでの心理過程、振り上げた腕の下しようがない錯綜した感情がどんなに精妙に語り尽されているにせよ、それは、こうした立場に立たされた男の当然経過しなければならぬ心理過程がいかにもそれらしく、正確に語られていると云うに止まって、その心情描写そのもののために女三宮、柏木事件が用意されたと考えるのは、道具立てと内容の不釣り合いが目立ち過ぎる。それならそれで他にいくらでも話の運びようがあった筈で、紫上の心理的葛藤を一人相撲に終らせたのと同じ原因、すなわち女三宮に対する源氏の関心のうすさが、ここでは宮の事故による源氏の「心情の揺れ」に一定のわくをはめ、それを一篇の物語の主題とは受けとり難いものにするように働いたと云って差仕えないのである。

それはともかくとして、この物語の関心事が事件の渦中に捲きこまれた人物、具体的に云えば紫上と源氏の心情の揺れ方を語ることにあったという想定にとつて最大の難関は、先にも云つたように、紫上の出家の過程は柏木の密通とは関係がなく、密通事件による源氏の心理的打撃は女三宮の降嫁とは直接の關係を持っていないことである。女三宮の降嫁による紫上の心情の揺れと、柏木の密通による源氏の心情の揺れとは、全く別々の事柄であつて、その間に物語として何のつながりも存在しない。つまり女三宮事件の波紋を、それがもたらした直接の結果である、紫上和源氏の心情の揺れという風に限定すると、前章で述べた通り、二つの波紋は全く触れ合うことなく弧を描いているのであつて、この三帖の物語を一篇の独立した物語として享受することは不可能になる。しかしこの三帖は果して「一篇の独立した物語」なのであろうか。

## (七)

以上に述べたような次第で、「女三宮物語」が結局幻影に過ぎないとすれば、女三宮事件のいきさつに関係のある諸事件と、それ以外の、例えば源氏の四十の賀宴、明石姫君の出産、六条院の女樂、紫上の大病等々の諸事件とを、一方は本筋的、他方は非本筋的として差別するいわれもないことになる。事実この三帖の物語を、物語の語り手の語り口通りに受けとれば、源氏の四十歳以後の数年間に、主として六条院の内部で起った出来事を、その起った順序のままに物語っているだけであり、それらの出来事の羅列を辛うじて統一しているのは、例の「年もかへりぬ」という年代記的手法である。とすればこの三帖は、玉鬘系の系列に属する独立した物語であるよりも、紫上系の続篇であり、源氏一代記の一部に過ぎないと云うべきではないだろうか。従って三帖をおおうような、或いはこの三帖を一代記から独立させるような、固有の主題はもともと持っていないと考えるべきではないだろうか。

たしかにこれまでの検討の結果では、「女三宮物語」という外皮の下から、「紫上系の続篇」という組織が顔を出したと云ってよいであろう。しかし顔を出したと云うよりも、そのまま放置しておけば自然につながって筋になり、物語になってしまふ個々の出来事を、作者がいろいろと工作をほどこして、個々の出来事のままであるように仕向けている形跡が認められると云った方が正確であろう。と云うことは、いろいろ工作をほどこさなければこの物語は「紫上系の続篇」にはならないということであって、これは、この三帖が源氏一代記の一部であると云うよりも、源氏一代記の一部であることをよそおっていることを暗示していないだろうか。

又、年立が同じく物語の統一原理として働いていると云っても、紫上系とこの三帖ではその働き方を異にしてお

り、紫上系においては年立が物語の背後にかくれて、内部からそれを統一しているのに対し、この三帖においては物語の表面に現われて、外部から統一しているという相違も、右の事実を裏付けるものではないだろうか。すなわち紫上系を構成する諸事件は、源氏の一生に起った一事件という資格において相互に同質であり、主題に対して同等の比重を持っている。又、何よりも本来源氏或いは人間の一生における一事件として構想されたものであるために、その構想通りに年月の経過に従って並びさえすれば、自然と人間の一生という全体を形成する素質を、それ自身内部に持っているということが出来る。それに対してこの三帖を構成する諸事件は、主題に対する比重が必ずしも均等ではなく、又何よりもその主題そのものが、紫上系の物語が、光源氏の前半生を何らかの必然性に貫かれた物語的な一生としてではなく、実人生と同じように偶然の出来事の積み重なり的一生として、つまりただ一生として語ったように、光源氏の後半生の出来事をただそれだけのこととして物語るといった性質のものではないのではないだろうか。従って、出来事をそれが起った順序のままに並べただけでは、ばらばらの出来事の単なる寄せ集めに過ぎなくて、その寄せ集めに何とか統一らしいものを与えるためには、本来作家の脳裏か、創作ノートにでも書かるべきプロットが作品の表面に現れて、外部からそれを統一するという不自然な事態が起ったと言うことは出来ないだろうか。その意味でこの三帖の年立は、厳密に云えばプロットではなく、いわば見せかけのプロットに過ぎないのであり、従って、それによって一代記の一部らしくよそおわれた一応の統一も、いわば見せかけの統一に過ぎないと云ってさしつかえないのである。

そしてこの三帖を構成する諸事件が均質ではないということについては、当然女三宮事件のいきさつに関係のある諸事件と、それ以外の諸事件との相違が注目される。作者はたしかに、女三宮事件のいきさつが何らかの筋にな

らないように、源氏の一生に起った個々の出来事として、他の出来事と出来るだけ平等に語るようにつとめている。しかし、これは作者或いは物語の語り手の語り方がそうなのであって、それぞれの出来事自体の性質は、一方はやはり女三宮事件の一齣以外の何物でもなく、一方は紫上系の統篇的要素の濃い、六条院の日常生活絵巻の一齣以外の何物でもない。そして、女三宮事件の経緯と年月の経過がびったり歩調を合わせていること、云いかえれば事件の経緯の一齣一齣を中心に置いて、その前後に六条院の日常生活が配置されているという物語の構成法は、この両要素の主題に対する比重がおのずから異っていることを示すものであり、紫上系の統篇的要素は、事件の経緯が筋になることを妨げるための、そしてこの三帖が源氏一代記の一部であることをよそおうための、いわばバックキングの役割を果すものでしかないことを想像させると云ってよいであろう。しかしバックキングに過ぎないからと云って、それらを「問題の外に置いて」しまつては困るので、作者が物語の劇的展開を犠牲にしてまで一代記の一部という体裁に執したのには、やはりそれだけの理由がある筈だと云わなければならぬ。

作者がこの三帖を、「女三宮物語」でもその他いかなる「物語」でもあり得ないように工夫をこらし、その一方で、と云うよりもそうすることが同時に、「一代記」の統篇というよそおいを保つべく工夫をこらすことになつてゐるとすれば、その作者の意図は、やはりこの三帖を、源氏一代記の統篇として受けとつてくれということではないだろうか。云いかえれば作者は、この三帖の主人公は、紫上系同様、光源氏その人にはかならないと云つてゐるのではないだろうか。ただ右に述べたような次第で、この三帖においては、光源氏の後半生がただ後半生として語られているだけとは思えないので、現に、女三宮事件の経緯がこの物語の主題ではあり得ないとしても、女三宮の降嫁によつて始まり、宮の出家と柏木の死によつて一段落し、その間事件のいきさつと年立とがびったり歩調を合わせ

ているという形態そのものは依然として残っていて、その女三宮事件のいきさつが物語の筋ですらないとすれば、一体何であるうか。一種の仕掛けであるとしか受けとりようがない。そして仕掛がある以上、当然その狙いもあるわけで、源氏の一生の或る期間に、女三宮の降嫁から出家に至る顛末という仕掛をほどこして、その反応をうかがっているのがこの三帖の物語ではないかと考えることが出来るのである。

しかしこの物語の主人公が光源氏であるという云い方は、誤解をまねくおそれがあるかも知れない。先にも述べたように、女三宮事件による源氏の心情の揺れを語ることは、それ自体がこの物語の主題であるとは受けとりにくく、その心情の揺れをもふくめた女三宮事件の全経緯が物語の仕掛けであると考えた方がよい。そして、作者がこの三帖を光源氏物語の続篇として受けとらせるようにつとめているということは、光源氏物語がそうであったように、この三帖においても、作者の関心は光源氏やその他の人物の個々の行為や個々の心情描写にあるのではなく、それらをひっくるめた或る全体にあることを指示するものだと受けとってさしつかえないだろう。つまり女三宮事件という装置をほどこされて実験台にのぼせられているのは、光源氏その人であると言うよりも、「光源氏の一生」であり、その一生が実現した六条院という「生ける仏の御国」であり、それを支えていたものであり、要するに光源氏物語そのものであると云った方が正確である。私は先に、作者は光源氏物語によって読者の間に形作られた光源氏のイメージを利用しながら、その文学上の運動を進めたと云ったが、玉鬘系の諸短篇が光源氏物語をいわば背景として構想されたとすれば、若菜・柏木物語は、右のような意味で、光源氏物語を前提として構想されたと云ってよいであろう。「二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、宰相にて大将かけ給へりけむ」等々、第一部の年立を計算する手がかりになるような箇所が若菜巻に入って急に数多く見出されるようになる

ことも、作者が若菜巻の執筆に當って、原源氏物語というものの性格を根底から検討し直したこと、改めてそれを全体として意識し直して、眼前に据えたことを物語っていると云って差しつかえないのである。

ところで女三宮事件の経緯が物語の仕掛けであり、光源氏の一代記がその被実験体であるとして、その仕掛けの狙い、つまり物語の主題は何であろうか。定説によれば、第二部の物語は、めでたしめでたしで話が終った第一部に続いて、あまり景氣のよくない源氏の後半生を語ったもの、或いは此頃のはやりの言葉では、古代貴族社会の解体の物語とでも云うのがそれである。私も別に異存はないので、事実女三宮事件の結果はろくな事にならなかった。女三宮は出家し、柏木は死に、紫上は夫を信用しなくなり、源氏はコキユの役割を押しつけられ、六条院の内部はがたがたになった。たしかに「生ける仏の御国」の解体の物語であり、光源氏失権の物語であると云ってよいであろう。しかしその解体や失権を実現した手続きが問題で、作者はただ漫然と不景氣な話題を並べることによって、めでたしめでたしの人生に対する、暗く、不如意な、従ってより現実的であるかのように思われる人生を語ったわけではなく、その結果、はからずも古代貴族社会の没落を象徴する絵巻が成立することになったのではないだろう。作者はその点に関して、想像以上に明確で、具体的な意図とそれを実現すべき方法論とを持っていたように思われる。そのことは例の仕掛けの存在が遺憾なく証明している。そして柏木の死に至る過程も、女三宮の出家の過程も、紫上の「麥則的な出家」の過程も、源氏の面目がつぶれた話も、度々くり返すように、それを語る事自体が物語の主題ではなく、仕掛けの一端に過ぎないのだから、それらを綜合して、結局こんな話だと云ってみたところであり意味がない。それは厳密に云えば仕掛けの性質を語ったことであって、主題について語ったことにはならないのである。

しかし仕掛けの性質が右のようなものであり、仕掛けのどこされた場が「光源氏の一代記」であるとするれば、この物語の狙いについて、大体の見当はつく。すなわち光源氏物語によって、当時の理想的な、或いは典型的な男性として造型された光源氏を、別の次元から批判し、その理想性を再検討することではなかったかと思われるのである。しかしここでもう一度、それはいかにして実現されたかと問わなければならない。

この物語を構成する諸事件が、女三宮事件のいきさつに関係のあるものと、それ以外のものとに大別され、一方が紫上系の続篇という舞台をつくるためのものであり、一方がそこにどこされた仕掛けであるとすれば、一体主題はどこで語られているのであろうか。どこにも語られる余地がないと云わなければならない。つまり仕掛けとそれがどこされた場が判明しただけでは、この物語を理解するのに十分な手がかかりとは云えないので、第三の、そしてもっとも重要な手がかりについて、次に述べなければならぬ。一口に云って、それは語られた内容に関するものではなく、その語り方の問題であり、この三帖が「女三宮物語」であるかのような外観を持ちながら、実は「一代記の続篇」であり、「一代記の続篇」であるかのように語りながら、単なる「一代記の続篇」とは受けとれないという、そういう「語り方」、或いはわれわれの「読み方」はどうして可能なのかという問題である。

## (八)

事が語り方に関するとするれば、どこを例にとってもいいようなものだが、これまでに述べたことの後始末の意味もふくめて、密通事件のいきさつについての語り口をとりあげてみよう。

事件のいきさつに関する叙述が、物語の伏線に過ぎないとしても、甚だ不器用で非効果的な伏線であることは既

に述べた。又これは、事件のいきさつがこの物語の主題でも筋でもないことを読者に察知させるための、意識的な、そしてやむを得ない処置であつたと考えざるを得ないことも既に述べた通りである。しかし密通事件が物語の仕掛けに過ぎないとしても、女三宮の出家も柏木自身の死も源氏の心理的な打撃も、この物語の有形の結果はすべてそこを起点として起っており、この物語にとって非常に重要な仕掛けであることは論をまたない。従つてその事件の動機やいきさつの説明が甚だいいかげんで、納得がいかず、事件がこしらえものとしか受けとれないとすれば、或いは柏木という人物のリアリティをわれわれが信ずることが出来ないとするれば、それは物語全体のリアリティに関わっており、この物語にとつて致命的な欠陥となるものと云わなければならぬ。

ところで事件の動機やいきさつについての説明は、既に見た通り、甚だいいかげんであり、殆ど説明の体をなしていない。それならばわれわれは密通事件の、ということはこの物語の仕掛け全体のリアリティを信じていないかと云うと、必ずしもそうではなく、むしろこの事件のいきさつは、結局、物語とか小説とのリアリズムが表現し得る限度以上の現実感をわれわれに感じさせると云つてよいのである。これはどういう工合につじつまが合っているのであろうか。

先ず当り前の話だが、それが物語の仕掛けであるということと、その仕掛けがこしらえものであるかどうかということとは全く別々の事柄であつて、柏木の恋愛が物語の伏線に過ぎないからと云つて、そのためにリアリティを持ち得ないとは限らず、十分のリアリティをもって語られているからと云つて、それが伏線以上のものだと考える何の理由もないことに留意する必要がある。現に、われわれが柏木の恋愛を物語の伏線以上のものとは受けとれないのは、それについていいかげんな説明がなされているからと云うよりも、恋愛という事実、密通という事実がた



だ事実として報告されているだけで、その動機や過程が、いかげんな説明によって代用され、物語として造型される手続きが省略されているからではなかつたらうか。つまり「いかげんな説明」ということが直ちに「伏線」ということに結びつくのではなく、「いかげんな説明」が「省略」という印象を与え、「省略」という印象が伏線に過ぎないという受けとり方をもたらずのである。

しかしいずれにしても、柏木の恋愛や事件や死についての記述が不完全であるとすれば、われわれは、不完全な記述しかされていない恋愛や事件や死について、つまり柏木という人物について、或るまとまった観念を持つたり、その実在を信じたりすることは出来ない筈で、事實はじめの中は、「いかげんな説明」||「省略」という印象にまどわされて、われわれはこの人物を筋の展開のためにのみ設定された道具的存在としか理解してはいない。しかしいつの間にか、少くともこの三帖を読み終るまでには、その動機やいきさつについて納得のいくだけの補足的説明がなされたわけでもないのに、この一箇の悲劇的な生涯の実在を疑うことは出来なくなっている。これは何事が起つたためだらうか。恐らく何事も起つたわけではないので、ただ省略と受けとっていたことが、実は省略でも何でもないことに途中で気がつくからにほかならない。

そして最初にそのことに気がつくのは、云うまでもなく柏木の恋愛のいきさつが筋にならないように語ろうとつとめている作者の意図に気がつくのと同時であって、柏木の死に至るいきさつが或る必然的な行為の連続として受けとれないのは、当然語られるべき動機や過程について筆が省かれていたためではなく、そのいきさつそのものが、いかなる必然性も持ち得ないように、本来設定されているからにほかならない。そしてそのことに気がつけば、例のいかげんな説明のいかげん性も明白になるので、柏木の恋愛の動機が求婚の動機と混同されているのは、当

然動機として語られてもよい筈の垣間見事件が、或る結果として語られたために、他には事実上、動機とみなすことの出来るものがないからであり、垣間見と密通との間の心理過程に物語が一言も触れていないのは、六年という長過ぎる過程が、事実上過程を過程であり得くしているからである。つまり本来存在しないものを存在するかのようには説明しようとするために、いいかげんな説明にならざるを得ないのであり、本来存在しないものを存在する筈だと信じこんでいるために、省略と受けとらざるを得ないのである。しかし、柏木の恋愛を動機も過程もあり得ないようなものとして設定した当の作者が、その一方で、存在しない筈の動機や過程について曲りなりにも説明を試みようとしているのはどういうことであろうか。

われわれがこれらの説明をいいかげんだと思わざるを得ないのは、それを、物語られていない動機や過程の穴埋めとして受けとり、しかも実際にはそれが穴埋めの任を果していないからだが、柏木の恋愛がもともと動機も過程もあり得ないようなものとして設定されていることが明らかになってみれば、これらのいいかげんな説明の目的が果して穴埋めのためであるかどうか、改めて考え直さなければならなくなる。一体われわれは、柏木の乳母と女三宮の乳母とが姉妹だったという式の説明を、まともに受けとっているだろうか。実際は誰も信用などしていないので、この一節が読者に与える効果はと云えば、柏木の密通を必然化する手続きが、それまでの物語で殆ど全くほどこされていなかったことを改めて思い知らされるだけである。そしてこのモラリストの作者が、こうしたとてつけたような説明で、密通の動機を多少とも納得させられるなどと本気で考えていたとは信じられず、又求婚の失敗と恋愛の動機とを不用意に混同するような誤りを犯す筈もないと考えるのが自然だとすれば、そして作者は現に、事件のいきさつがつかって筋にならないように工夫をこらしているとすれば、これらの説明は、むしろその逆効

果を狙って挿入されたものではないかと考えることが可能であろう。つまり穴埋めのためではなく、むしろ穴の存在に注意をうながすための説明であって、作者は二人の乳母の姉妹関係をもっともらしく語ることによって、事件の動機を補強したつもりになっているのでもなく、動機のないことについて苦しい云い訳をしているのでもなくて、柏木の恋愛にはもともと動機などはなかったと云っているのであり、或いは、世間で動機などと呼んで有難がっているものは、およそこんな程度のものだと云っているとさえ受けとって差し支えないように思われる。何故なら、作者はこうした「いいかげんな説明」によって、間接的に柏木の密通に必然性のないことを印象づけようとする一方、柏木の密通が偶然の所産に過ぎないことをそれとなくしかし直接に指摘することも忘れてはいないからである。柏木は紫上の大病という機会をとらえて、女三宮の許に手引きすることを小侍従に強請しており、そうした意味ではもちろん、密通事件は柏木の意志から発している。しかしその柏木の予定には、必ずしも密通という行為まではふくまれていなかったのだ。

まことにわが心にもいとけしからぬ事なれば、氣近く、なかなか思ひ乱ることもまさるべきことまでは思ひもよらず、ただいとほのかに、御衣のつまばかりを見奉りし春の夕の、鮎かず世と共に思ひ出でられ給ふ御有様を、すこし氣近くて見奉り、思ふ事をも聞え知らせせば、一行の御返などもや見せ給ふ、あはれとや思し知る、とぞ思ひける。(一七三頁)

というのが柏木の心づもりであった、そしてこうした心づもりから密通という行為にまで逸脱していかざるを得なかったのは、小侍従という軽はずみな女房が、必要以上に宮の御側近くまで柏木を案内したためであって、右の一節にすぐ続いて、

よき折と思ひて、やをら御帳の東面の御座の端にすゑつ。さまざまもあるべきことなりやは。

とあるのは、そのことを、つまり密通事件が紫上の大病という偶然と小侍従の非常識という瑣事によって、いわば物のはずみとして起ったことを指摘しているのである。

そして柏木の死に至るいきさつに、物語などの与え得る限度以上のリアリティを保証しているものも、そのいきさつを支配している、この無動機性、偶然性であると云ってよいので、人間の行為には必ず動機と過程がある筈だという仮定は、探偵小説上の常識ではあっても、必ずしも現実の人生の常識ではない。少くともわれわれは、われわれの頭がそれと理解し得るものしか動機とは認めないので、真夏の海岸の直射日光が殺人の動機だというムルソウの主張は、遂に裁判官の容れるところとはならなかった。そうした意味で、動機とか過程、或いは必然性というもの、端倪すべからざる現実に対する、われわれの有限な解釈に過ぎないと云ってさしつかえないので、作者が柏木の死に至るいきさつを個々の出来事としてしか語らなかつたということは、そのいきさつに解釈をほどこさなかつただけであり、省略された、或いは「いいかげんな説明」によって代用されたのは、存在した筈の動機や過程ではなく、「いいかげんでない説明」、「納得のいく解釈」であると云ってよいのである。

しかしそれだけでは、つまり柏木の一身上に起った出来事を偶然の手にゆだねっ放しにしたのでは、われわれがそれらの偶然事の羅列から、柏木の恋、或いはその一生という、何らかのまとまった観念を与えられることは不可能であろうし、そのいきさつが現実的であるかどうかの判断すら難かしいだろう。云いかえれば、事件の経過、事件の起り方のリアリティは偶然が保証するとして、動機もなく、過程もなく、将来の当てもない恋愛を六年間持続させ、あげくの果にそのために身を滅ぼしたという事柄自体のリアリティは何が保証するだろうか。柏木の一生が、われわれの一生と同じように、偶然の出来事の連続もしくは非連続であるとして、その偶然事の連続もしくは非連

續が確かに柏木の一生であることを保証するものが必要であり、そういうものが実はないわけではないので、光源氏の一生においては、それが年立という設計図であったとすれば、柏木の一生においては、作者は柏木という一箇の性格を用意していたと云うことが出来る。そしてわれわれが、柏木が柏木という一箇の性格であることに気づいて、その恋の性質を理解し、その死に至る経緯の別の意味での必然性を了解するに至るのは、柏木が物語の仕掛けとしての任務を完了してから、つまり柏木巻に入って、その冒頭の次のような一節によってである。

衛門のかんの君、かくのみなやみわたり給ふこと、なほおこたらで、年もかへりぬ。大臣北の方、思し歎くさまを見奉るに、強ひてかけはなれなむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、またあながちに、この世に離れ難く、惜みとどめまほしき身かは、いはけなかりし程より、思ふ心ことにて、何事をも、人に今一きはまさらむと、公私のことにふれて、斜ならず思ひのぼりしかど、その心かなひ難かりけりと、一つ二つの節ごとに、身を思ひ貶してしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行に本意深くすすみにしを、親たちの御うらみを思ひて、野山にもあくがれむ道の、重きほだしなるべく覚えしかば、とざまかうさまに紛はしつゝ過しつるを、つひになほ世に立ちまふべくも覚えぬ物思の、一方ならず身に添ひにたるは、われより外に誰かはつらき、心づからもてそこなひつるにこそあめれ、と思ふに、うらむべき人もなし、神仏をもかこたむ方なきは、これ皆然るべきにこそはあらめ……。 (二三三頁)

われわれはここで、極めて荒削りだが、的確な線で刻まれた、一人の夢想家の像に出逢うのである。夢想家と云っただけではもちろん不十分だが、要するに一つ二つの節でなべての世の中をすさまじく思いなってしまうような人間、自己の観念の世界と外の現実との関係がノーマルな状態で保たれていない人間、真の意味で現実的なものは自己の観念の世界であり、外界は影に等しいような人間である。右の一節がスケッチするこうした人間像に、われわれは確かに薫中納言の父親の面影を認めるであろうし、或いはマル・ド・シエクルという言葉を連想することも

可能かもしれない。けだし道長以降の平安朝社会ほど、世紀末という言葉にふさわしい社会もないのだから。

ところで、このような人間が恋をしたとすれば、われわれはそこにどんな恋愛の姿を想像することが出来るだろうか。若菜巻の恋愛がまさにそれだと云わなければならぬ。この現実喪失者にとっては、恋愛もいわば觀念に過ぎないので、動機もなく過程もなく対象すらさだかでないことが、柏木の恋愛の特徴である。と云うよりも、動機もなく過程もなく対象すらないことが、柏木の恋愛にとつては必要な条件なので、例の説明が、女三宮を聞え外した口惜しさが恋愛の発端であると語っていたが、これは或る意味では正確な説明であり、われわれは、女三宮が六条院に降嫁し柏木の手の届かない存在になったことよつて、つまり柏木にとつて現実の存在ではなくなったことよつて、その瞬間から、柏木の恋愛が始まったと考えることが出来る。柏木が候補者の一人であり、従つて女三宮が現実には結婚の対象である間は、求婚の意向も、姉尚侍や父太政大臣の口を通してしか語られない。先の柏木自身の述懐に照し合わせれば、「御子達ならずは得じと思へるを云々」などもあまり当てにはならないので、何を考えているのかわからない息子のために、周囲がやきもきしたというのが求婚の真相ではないだろうか。そして柏木の片思いが、六年の間何らの現実的支えもなしに持続し得たのは、それが片思いであつたからであり、片思いである限り永久に晏如として続いたのであると考えることが出来る。

こうした恋愛が、対象との間に何らかの現実的交渉が生じて、女三宮という觀念が觀念ではあり得なくなつた時にどうなるか、物語は事件後の数日間に柏木の陥つた状態を次のように語っている。

かんの君はまして、なかなかなる心地のみまさりて、起き臥し明し暮しわび給ふ。祭の日などは、物見にあらそひ行く君達かきつれ来て、云ひそそのかせど、なやましげにもてなして、ながめ臥し給へり、女宮をは、かしこまりおきたるさまに

もてなし聞えて、をさをさうちとけても見え奉り給はず、わが方に離れ居て、いとつれづれに心細くながめ給へるに、重  
べの持たる葵を見給ひて、

くやしくぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに

と思ふもいとなかなかなり。世の中静かならぬ車の音などを、余所の事に聞きて、人やりならぬつれづれに、暮し難く覚ゆ。  
(一八〇頁)

「明し暮しわび給ふ」、「いとつれづれに」、「人やりならぬつれづれに」、「暮し難く覚ゆ」等々の言葉が、必ずしも逢う瀬と逢う瀬との間のやるせない時間を指しているのではないことは、柏木の歌が証明しよう。恋が現実化したとたんに柏木を襲ったこのアンニュイは、柏木の中で恋が死んだことを物語っている。恋が死んだために、今まで恋が占めていた場所を「つみ」や、後悔や、葵祭のさんざめきや、雑多なものが通り過ぎていく。そして柏木は、からっぽな心の片すみで、この「人やりならぬつれづれ」、「暮し難さ」こそ、「とざまかうざまに紛らはし」ても紛らわし切れない、自己の生存の条件であることを思い知らないわけにいかなかったのではないだろうか。少くとも柏木がその肉体の死を自覚した時にはそのことを知っており、現実と観念との果てしない鬼ごっここの一生を、「恨むべき人も」なく、「神仏もかこたむかたなき」一生として甘受したことは、先の述懐が物語っている。そしてわれわれが柏木の精神のメカニズムを理解して、柏木のような人間にとつて死が唯一の救いであることを納得することが出来るならば、柏木の死は、源氏のひとにらみのせいにせよ何にせよ、柏木という一箇の宿命が、それによって完成した死であることを疑うことは出来ない。事実死は救いをもたらしたので、その証拠には、柏木が肉体の死を自覚すると同時に、いったん死んだ恋は再び息を吹き返したように見える。死を自覚することによって、現実はその

だけ遠いものとなり、現実から遠ざかった度合だけ、現実が柏木にとって愛惜すべきものとなったのである。

ところで、われわれが柏木の恋愛と死に至るいきさつの必然性を右のように理解して、そのリアリティを納得する過程で、われわれが第一部の物語にかつて出逢わなかった、新しい事態が起っていることに気づかないであらうか。例えば、求婚の失敗が恋愛の動機であるという説明、二人の乳母が姉妹関係にあり、宮の幼い時からその身辺の事情を耳にしていたために「かかる思もつきそめたるなりけり」という説明を、われわれがまともに受けとっていたら、どうなるであらうか。柏木の恋愛の性質は支離滅列になり、柏木という人物がわれわれの脳裏で何らかの像を結ぶことはあり得なかったに相違ない。又、事件が物のはずみから起ったというくだりも、物語の語り手が表向きに語っていることは、小侍従の無思慮・非常識に対する非難であり、われわれが物のはずみというところに力点を置いてこの一節を受けとるのは、ここで小侍従を非難したり、それによって柏木の行為を弁護したりすることが、この物語にとってどれほどの意味があるかというわれわれの判断に基いてのことである。事件の直後に柏木をおそった憂悶についても、その正体をわずかにもらしているのは、厳密に云えば一首の歌だけであり、あとはわれわれの判断にまつほかはない。

つまりこの三帖の物語には、語り手が表向きに語っていることと、その背後に隠見する「事の真相」とでも云うべきものがある。われわれがその「事の真相」にたどりつくためには、語り手の語ることを、或る場合には無視し、或る場合には裏返し、或る場合には補足し、或る場合にはそのままに受けとるといふ、極めて複雑な読み方が必要なのである。そして、語り手のいうことを一から十まで信用してかかるわけにはいかないという新しい事態は、われわれに、この三帖における語り手の性格、語り手と作者との関係について根底から考え直すことを余儀な



くさせる。

源氏物語が、光源氏や紫上と親しい関係にあり、その内情に通じていた古女房が、自分の見聞きした事柄を物語るといふたてまえで書かれていることは周知の通りであり、そのような語り手自身の立場を直接反映した言葉或いは文章が、ところどころに散見することもよく知られている。例えば、

あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、この片端だにかたはら痛し。(賢木)

このほどのこと、くだくだしければ、例のもらしつ。(夕顔)

その夜の歌ども、唐のの大和のも、心ばへ深う面白くのみなむ。例の言足らぬ片端は、まねぶもかたはら痛くてなむ。

(鈴虫)

等々がそれであり、こうしたたてまえは、五十四帖を通して変らない。

そしてわれわれは、物語の内容がフィクションである以上、源氏或いは紫上づきの古女房という語り手も当然虚構の存在であり、虚構の存在である以上、実質的には存在しないも同然だと受けとって、語り手||作者という図式を殆ど意識にのぼせることもないほど信じ切って疑わない。そして第一部に関する限り、こうしたわれわれの既成概念をゆるがすような事態は起っていないと云ってよいだろう。もつとも、虚構の存在すなわち存在しないも同然という考え方には明らかに論理の飛躍があつて、それが例えば原源氏物語に対するわれわれの理解に、或る本質的な欠陥をもたらしているように思われるが、事が本質的問題に属するために、差し当っては、語り手||作者、或いはその逆の図式で大体のことは処理が出来る。

しかしこの三帖において、語り手の語ることのほかに事の真相というべきものがあつて、語り手の語ることをそ

のまま受けとつては事の真相にたどりつくことが出来ないとするれば、右の図式がもはや通用しなくなっていることは明瞭であろう。すなわち語り手と作者の分離という全く新しい事態がこの三帖で起つたと考えてさしつかえないのである。

ところで、第一部において作者と一体とみなして一応さしつかえのなかつた語り手は、作者から分離することによって、この三帖においては実質的に何になつたのであろうか。語り手の資格が、本来源氏或いは紫上づきの古女房の一人というたてまえであり、作者から分離することによってそのたてまえ通りの存在になつたとすれば、語り手自身が物語に登場して、源氏の足をさすったり、歌の一首も詠んだりして少しも不思議はないわけであり、事実この三帖における語り手の立場の現われ方は、それに近い性質を示しているように思われる。先の「さまざまもあるべきことなりやは。」がその一例であり、更に、

六条の女御の御腹の一の宮、坊に居給ひぬ。さるべき事とかね、思ひしかど、さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなりけり。(二二八頁)

などはその好例であつて、恐らく五十四帖を通して、語り手がこれほどはっきりと物語の舞台上の一人としての立場から物を云っている例はないであろう。語り手Ⅱ作者という図式に代つて、語り手Ⅱ一登場人物という図式が成立したと考へてよいのである。

これは語り手が作者の代理人という万能の立場から、単なる一古女房という、極めて限定された立場に下落したことを意味するものであつて、先にその一端を見たように、この三帖の語り手の云うことが甚だ当てにならないのはそのためであり、われわれが語り手の語っていることを、裏返したり、無視したり、勝手に取捨選択し得る、或い

はしなければならぬ理由もそこにある。つまり、歴史家がその資料である古記録類を取り扱う態度、すなわち記録者の個人的、主観的な立場を考慮に入れながら、その背後の客観的眞実を洞察するという態度こそ、われわれがこの三帖の物語に対してとるべき態度であり、作者がわれわれに要求する読み方であると云つてよいのである。このことは、女三宮の降嫁決定までのいきさつを述べた、若菜巻冒頭の記述を注意深く読むことによつて次第に判然とし、やがて、光源氏の晩年に起つた一事件の眞の意味が、語り手ではなく、物語そのものを通して明らかにされるであらう。